



「人文・社会科学系研究の評価に関する論点地図Ver.1」を作成しました

2022年9月、「[人文・社会科学系研究の評価に関する論点地図Ver.1](#)」が完成しました。この「地図」は、学術研究支援室（KURA）の人文・社会科学系研究支援プログラムメンバーが、人文・社会科学系URAネットワーク*1のURA有志によるWGメンバーとともに企画し、「責任ある研究評価」*2への意識醸成、研究評価の改善に向けた活動を支援する[DORA Community Engagement Grants](#)の助成を受け、[NPO法人ミラツク](#)の協力を得て制作したものです。

【背景・目的】

2014年以降開催されてきた人文・社会科学系研究推進フォーラム及びJINSHA情報共有会では、フォーラム運営ネットワーク校が中心となり、人社系研究における研究評価の課題について[継続的に議論を進めてきました](#)。その中で取り上げた「責任ある研究評価」*2という概念は、人社系研究に限らずあらゆるステイクホルダーによる評価方法の見直しを求める包括的な概念として注目されています。JINSHA情報共有会では、この「責任ある研究評価」に焦点を当てたシリーズを組み、評価に関する継続的な議論の場を作ることを目指してきました。

このシリーズの2回目となる、[第13回JINSHA情報共有会 with C4RA「責任ある研究評価を考えるシリーズ ～定量的評価指標の現在と未来に向けた課題とは～」](#)（2022年3月16日開催）では、研究IRデータに詳しいURAを中心としたグループ、[Code for Research Administration \(C4RA\)](#)のメンバーも参画、議論の輪を広げるとともに、活動を次のフェーズに進めるために、これまでに蓄積された情報・論点を整理するマッピングの必要性が共有されました。どこまでなら見えていて、どこからが見えていないのかを把握し、同じ議論を繰り返さず、すでに議論されたことを踏まえて考え、実践につなげていくためです。

そこで今回は、次のフェーズに進むための資源として、重要な論点・情報を整理し、視覚的にも魅力的な「地図」を作成することにしました。評価の問題に関するリテラシーの

差を埋め、皆で議論をする土台とすることで、URA等研究支援者が「責任ある研究評価」を理解し、その多様な活動において何らかの実践に踏み出す一助となることを企図しました。

【DORA Community Engagement Grants】

本プロジェクトはDORA Community Engagement Grantsの助成を得て実施されました。DORA³が研究評価の改善に向けた幅広い活動に対して支援する同助成は、2021年11月に公募を開始、2022年1月末に採択結果が発表されました。ウガンダ、オーストラリア、インド、オランダ、アルゼンチン、ブラジル、コロンビア、ベネズエラからの9つの多様なアプローチによるプロジェクトとともに、人社系URAネットワークの企画「Creating a Platform for Dialogues on Responsible Research Assessment」が採択されました。

【プロジェクトのプロセス】

本プロジェクトは以下のプロセスで実施しました。



・企画構想

2022年6月初旬にWGメンバーでのキックオフミーティング、またNPO法人ミラツクのプロジェクトメンバーとのミーティングを開催し、このプロジェクトで目指すものは何か、またそれを具体的にどう進めるかを検討しました。「すでにある未来の可能性の実現」をテーマに様々な共創プロジェクトを手がけるミラツクのメンバーからは、その後も定期的なミーティングで様々なアドバイスを受け、プロジェクトに伴走いただきました。

・ヒアリング

地図作成に向けて、人社系研究の評価に関して文献では得られない知見、基盤情報をあらかじめ確保する目的で、以下の3名の有識者にお話をお伺いしました。

藤井翔太准教授 大阪大学社会ソリューションイニシアティブ

後藤真准教授 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館

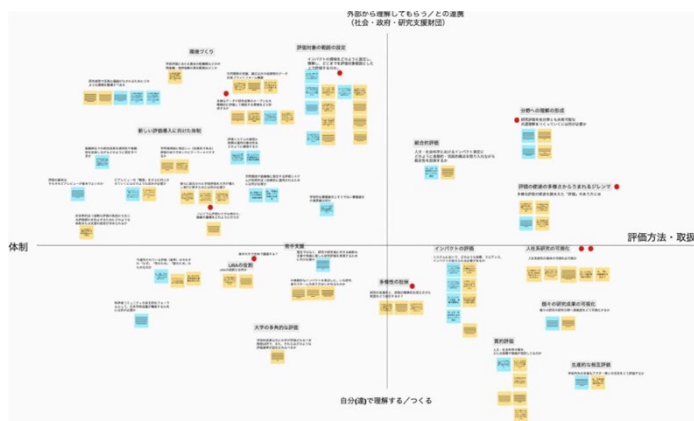
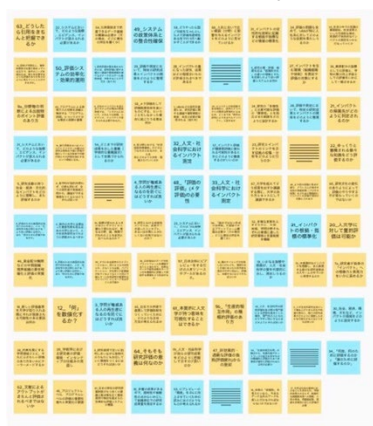
標葉隆馬准教授 大阪大学社会技術共創研究センター

・文献リスト作成

人社系研究の評価について、また関連する文献・リソースをWGメンバーが協力して約65点リストアップしました。その65点から、今回のプロジェクトにとっての重要度を加味してWGメンバーが推薦コメントとともに投票、対象文献を18点に絞り込みました。

・論点整理・仮のマッピング（地図Ver. 0）作成

NPO法人ミラツクのプロジェクトメンバーにより、選別された18の文献、3本のインタビューから90の論点が抽出されました。またその90点をグルーピングし、仮軸によるマッピングが作成されました。



・JINSHA情報共有会

上記で抽出された論点、そして仮のマッピングを元に第14回JINSHA情報共有会「責任ある研究評価を考えるシリーズ ～一歩前へ進むための『地図』作成～」(7月28日オンライン開催)で議論を深めました。

当日は趣旨説明、NPO法人ミラツクの浜田真弓氏による上記の論点抽出方法と抽出された論点の紹介、本プロジェクトWGメンバーによるモデルディスカッションの後、以下の3グループに分かれてディスカッションを行いました。

グループ①：人社系の可視化

東京大学史料編纂所シニアURAの平澤加奈子氏のリードにより、「人文・社会科学が自らの研究成果をどのように把握して示すのが良いのか」「本質的に人文・社会科学研究が持つ意味の可視化は可能か」「人文・社会科学の質をどんな指標や根拠が測定しうるのか」といった論点を出発点に「人社系の可視化」について議論を深めました。

平澤氏の「多言語、多様な分野・研究成果、多様な出版形態、息の長い研究、多様な連携、オープンサイエンス。これらの多様な要素の表現方法としての可視化が必要だが、研究者の立場に立った「責任ある研究評価」のためにURA等研究支援者ができることは何か？」という問いかけに対し、ディスカッションでは以下を含む様々なコメントが出されました。

- 人社系の多様性の定義とは何か、また多様性のどの部分を話すかを考える。
- 研究の「意味」を「存在意義」だととらえるとする、その可視化が難しいということは文系だけではなく理系にも当てはまる。文字化できないようなものをどうするか。何を、どういう風に可視化するか。
- 人社系の成果の可視化は可能。事実だけでも集めていくと良い。意味はそれぞれの研究者がテキストで語れるようにしておくべきであり、URAとしてはそれを研究者からうまく引き出せるようにすべき。その努力を続けないと、研究評価の土台に乗っていない。
- 十分なデータベースがない状況だが、理系と対話するには何か目に見えるもの、定量的評価はやむをえない。
- 人社系は社会からすでに受け入れられていると思う。どんなところに価値を見出してもらっているのかを理解するという意味で、可視化にはマーケティングという視点が必要であり、そこでURAが役割を担える。

グループ②：定量評価ニーズへの対応

人社系研究の多様性があったとしても、機関評価や個人評価、あらゆるところで定量評価のニーズがあり、対応を迫られる中、URAとしてはどのように考えていけばいいか。この

グループではIRに詳しいC4RAのメンバーの協力も得て、実践への道筋が見えるような機会となることを目指し、京都大学学術研究室URAの佐々木結氏のリードにより議論が行われました。

- 定量的／定性的評価という手法の上に目的があるので、その目的に照らして方法が相応しいか見直すべき。
- 仮にプログラム評価の指標が、Top10%論文数などと設定されたとき、それが固定された後であれば従わざるを得ないが、そうであっても本来の目的に立ち返って、各機関の目標に貢献するこういう成果もあった、という見せ方ができるよう、定性的な成果の可視化を効果的にする方法も普段から研ぎ澄ませておく必要がある。この部分において、URAが活躍できるのではないか。
- 可視化を効果的にするときの視点として、あるいは文系vs理系の分類を絶対視せず相対化する軸として、「個人研究／チーム研究」、「競争／非競争」、「知識創出／問題解決」など多様な軸、分類が出てくるとよい。
- 今回作成する地図は、特定のプログラムへの対応を議論する際に、同じマインドセットを持つためのツールとして使えるといいのではないか。また、「魂を忘れた」時（指標に対する実績をよく見せるために骨を折っているとき）に立ち返り、データの限界は何か、本来の目的は何か、責任ある研究評価とは？といったことを忘れないようにするものとしても使えるのではないか。
- 評価の問題は非常に複雑だが、小さなステップだとしても色々な実践をしてみて、グッドプラクティスを積み重ねていくしかない。

グループ③：地図の作り方

グループ③は人間文化研究機構特任助教の押海圭一氏のリードにより、俯瞰的に地図自体について、こういったものならこれまでの議論や情報の蓄積を責任ある研究評価の実践につなげることできるのか、ということについて考えました。

モデルディスカッションでは押海氏から、地図整理のタネとして、

- 論点の整理（目的に見合ったものか、不足・不要な論点はないか）
- 論点間の関係性の整理、論点以外の情報の追加
- 分類：方向性（内向き／外向き）、目的（資源配分／アカウンタビリティ）、ターゲット（研究者／外部ステークホルダー）等
- 研究の価値を評価するために把握すべき点（量、学術的価値（卓越性）、社会的価値

(インパクト)、学術的価値と社会的価値の関係)が把握できるかどうか等について話題提供があり、それに基づいたディスカッションでは以下の意見が出されました。

- 論点として挙げられている課題は解決の糸口が見つかっているのか。問題の大きさ・深刻度がわかるといい。
- 論点を前に進めようとした時に、壁になる周辺の課題が出てくるのではないか。その周辺を追加できると、解決すべき焦点に話移っていくのでは。
- 論点に対して、解決を求める課題の形にしないと地図の意味がないのではないか。人社系の研究評価では目的・ゴールが明確になっていない。方向性の合意のために地図を作ることができるといい。
- 同じ議論を繰り返さない、どこを議論しているか位置がわかる、そういった共通認識を醸成するための地図にすべき。
- 立場が違うアクター（政策側、助成機関、大学執行部、研究者、URA）が話すときに議論が噛み合わないことが多いが、地図によって課題が共有されるようになれば良い。

・まとめのディスカッション

グループディスカッションの後のまとめのディスカッションでは、NPO法人ミラツク代表の西村勇也氏、東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室URAの新澤裕子氏、国立歴史民俗博物館准教授の後藤真氏がこれまでの議論を振り返りました。

まず何のための地図なのか、ということについて以下のようなコメントが出ました。

- 評価の議論は複雑に色々なものが絡まり合っている。どの部分を議論しているのか整理し、どのポジションの議論を自分がしているのかを把握するための地図がいいのではないか。
- 議論する時の共通理解、前提など、散らばっているものを集めて土台にして議論する。そうすると議論を積み重ねることができる。
- 建設的な議論をするために、論点の要素分解をし、どこに課題とハードルがあるのかが分かるようになるといい。

次に、地図を様々なアクターとどうやって完成していけばいいのかということについては、以下のような展望が示されました。

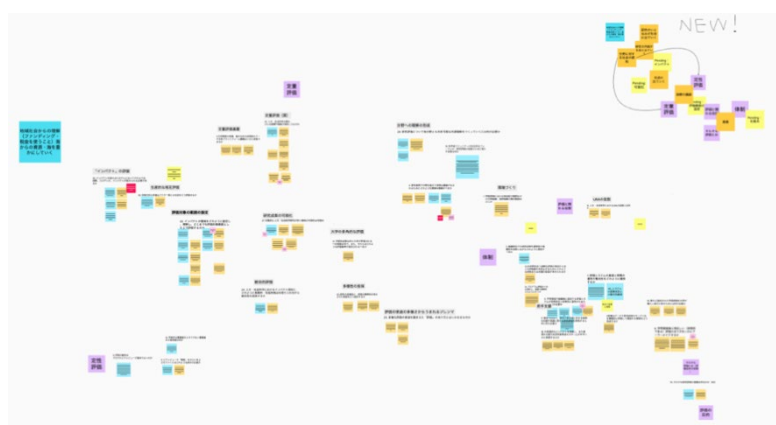
- 地図のバージョンアップを目的に集まり、今年はこの部分が進んだ、ということを確認し合えるネットワークが発展すること。
- 論点には文献に出てこない現場の課題感があるが、これを議論の中で吸い上げることができる別の縮尺が現れる。整理をすることがどう課題に役立つのかということ、地図をどうブラッシュアップしていけばいいかの参考になる。
- シチズンサイエンスのように広く国民の意見を聞くことができればいいのか。

・議論の整理・地図の作成、デザイン

以上JINSHA情報共有会での議論を経て、WGメンバーと後藤真准教授で最終の地図の形を作成しました。

- 29の論点を「地方」として分け、それぞれの関係性を考慮して配置。
- これらの論点が陸、海が社会というイメージ。左上の山（評価の目的）から始まり、評価の体制、役割、手法としての定性評価・定量評価。その間にある「インパクト評価」が河口となり、その先に**海（=社会）**が広がる。
- 研究コミュニティは海（=社会）から恵みをもたらないと生きていけない。この海を豊かにし、資源を投下してもいいと理解してもらう必要がある。それがかなえば、海で水蒸気から雲ができ、また山の上に雨が降って土地が潤うかのように、「そもそも評価とは」や各指標の議論へ戻ってきて再考を促し、評価の改善にもつながっていくのではないか。

このような循環・エコシステムを表現する論点マップとして、再配置したのが右の図です。



これを元に、NPO法人ミラツクのデザイナー、中家寿之氏のデザインにより地図が完成しました。

【おわりに】

以上のように今回のプロジェクトでは、地図作成のための一連のプロセスを、URAが中心となり機関・所属を超えた協力体制を築きながら実施しました。様々な要因で「責任ある研究評価」の実践にはまだまだ距離がある状況において、多様なアクターの力を持ち寄り、議論を重ね深めながらアプローチすることによって、単にこれまでの議論を整理するだけではない、実践に向けて使える地図を目指しました。NPO法人ミラツクによる情報の構造化と効果的な可視化のノウハウ、ヒアリング協力者の知見、そしてURAを中心に本プロジェクトの過程で行われたたくさんの対話。これらにより、今回の地図が課題の超え方への複数の道筋を示すものになっていること、また地図を使ってくださった方のご意見を反映しながらVer. 2、Ver. 3と続き、地図を中心に議論のネットワークが広がっていくことを願っています。

このプロジェクトは、学術研究支援室（KURA）の人文・社会科学系研究支援プログラムメンバーURA（藤川 二葉、佐々木 結、稲石 奈津子、天野 絵里子、藤田 弥世）、IRチームの岡崎 麻紀子URAが、人文・社会科学系URAネットワーク^{*1}のURA有志によるWGメンバーとともに企画しました。

（文責：学術研究支援室 藤川）

*1 人系研究支援に従事する複数大学のURAの連携により2014年度から実施している人文・社会科学系研究推進フォーラムの運営母体。関連企画として、2017年度から中規模程度の情報共有会を不定期開催。現在のメンバー校は、以下13校（大阪大学、京都大学、筑波大学、早稲田大学、琉球大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学、広島大学、東京大学、東北大学、新潟大学、神戸大学）。

*2 [Stephen Curry et. al. \(2020\)](#)によると「多様で包摂的な研究文化のもとで、複数の異なる特性を有する質の高い研究を促し、把握し、報奨するような評価のアプローチを指す包括的用語」と定義される。訳文は、[林隆之, 佐々木結 \(2021\)](#)による。

*3 「責任ある研究評価」の代表的な宣言である[研究評価に関するサンフランシスコ宣言](#)（DORA（San Francisco Declaration on Research Assessment）, 2013）は、細胞生物学分野の学会、学会誌編集者、研究者が中心となり、ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）の限界を指摘。論文が掲載されている雑誌名ではなく、その論文の科学的な内容こそを評価、また、多様な研究成果物の価値とインパクトを評価するよう勧告している。2018年以降は専任のスタッフを抱え、[イニシアティブとして様々な活動を展開](#)している。

京都大学学術研究支援室 〒606-8501京都市左京区吉田本町 TEL：075-753-5108 FAX：075-753-5110 E-MAIL：
contact@kura.kyoto-u.ac.jp